

資料

平成29年度の細菌性・ウイルス性食中毒（疑い）事例について

江藤良樹・重村洋明・カール由起・中山志幸・濱崎光宏・
小林孝行・中村麻子・吉富秀亮・芦塚由紀・世良暢之

福岡県において平成29年度に発生した細菌性・ウイルス性食中毒（疑い）事例は 23 事例であり、当所病理細菌課とウイルス課にて検査した検体は延べ 131 検体であった。平成 29 年度に検出された食中毒細菌は、カンピロバクター・ジェジュニ、カンピロバクター・コリ、サルモネラであった。ウイルスではノロウイルスが検出された。病因物質が検出された、若しくは特定された事例は 23 事例中 19 事例（83%）であった。

[キーワード：食中毒、カンピロバクター、ノロウイルス、サルモネラ]

1 はじめに

厚生労働省の統計によると、全国の食中毒発生事件数は平成 10 年の 3,010 件をピークに減少し、平成 19 年に 1,400 件を下回って以降、横ばい状態である¹⁾。福岡県における過去 5 年間の年間食中毒（疑い）事例での検査依頼数は平成 24 年度が 36 件、平成 25 年度が 28 件、平成 26 年度が 25 件、平成 27 年度が 38 件、平成 28 年度が 31 件と推移している。今回、福岡県における食中毒予防対策に資することを目的とし、平成 29 年度に福岡県内で発生、または、県民が他の都道府県で罹患し当所に依頼のあった食中毒（疑い）事例について、主として病因物質の観点から資料としてまとめた。

2 細菌性・ウイルス性食中毒発生時の検査方法

平成 29 年度は、23 事例、131 検体（患者便、従事者便、食品残品、拭き取り、菌株など）について、食中毒細菌検査・寄生虫及びウイルス検査を実施した。検体の検査対象数は、細菌・寄生虫検査のみ実施したもの 66 検体、ウイルス検査のみ実施したもの 12 検体、いずれも実施したもの 53 検体であった。患者の症状などから細菌性食中毒が疑われる場合は、まず搬入された検体から食中毒細菌を検出するため、SS 寒天培地、TCBS 寒天培地、食塩卵寒天培地、スキロー改良寒天培地、クロモアガーサルモネラ寒天培地などで直接分離培養するとともに、アルカリペプトン水、7.0% 塩化ナトリウム加トリブチケースソイブイオン、カンピロバクター選択増菌培地（プレストン組成）、ラポポート・バシリアディス培地などを用いて増菌培養し、直接培養と同様な培地で分離培養した。寒天平板培地に疑

わしい集落が発育した場合は、釣菌して、TSI、LIM 寒天培地などを用いた生化学性状試験、血清型別、毒素型別、PCR を用いた病原遺伝子の検出などの試験検査により、食中毒細菌の同定を行った。また、寄生虫が疑われる場合には、平成28年4月27日付け生食監発0427第3号「*Kudoa septempunctata* の検査法について」、平成28年4月27日付け生食監発0427第4号「*Sarcocystis fayeri* の検査法について」及び平成26年5月26日付け事務連絡「食中毒患者便からの*Kudoa septempunctata* 遺伝子検出法（参考）について」に基づき検査を行った。

一方、ウイルス検査は糞便（数グラム程度）をリン酸緩衝液（pH 7.5）で約 10% 乳剤とし、10,000 rpm で 20 分間遠心した。この上清から RNA を抽出し、逆転写酵素を用いて相補的な DNA を合成した。さらに、ノロウイルス等の遺伝子に特異的なプライマーを用いて PCR を実施し、増幅産物を電気泳動で確認した。増幅産物が確認された検体については、さらにシーケンスを行ない、その増幅産物の塩基配列を決定し、ノロウイルス等の確認及び遺伝子型の決定を行なった。

3 結果及び考察

平成 29 年度の食中毒（疑い）事例において原因物質として疑われる病原微生物が検出された事例、若しくは原因物質が特定された事例は 23 事例中 19 事例（83%）であった（表 1）。今年度の特徴は、平成 29 年 9 月から 10 月の事例でカンピロバクターが多く検出されたこと、また、一年を通じてノロウイルスの事例が発生し、その事例数は例年と比べ少なかったことであった。その他、平成 29 年 8 月にはサルモネラによる食中毒事例が 2 事例発生している。

病因物質別では、カンピロバクターによるものが 10 事例（全事例の 43%）、ノロウイルスによるものが 7 事例（全事例の 30%）、サルモネラによるものが 2 事例（全事例の 9%）であった。

ノロウイルスが検出された事例では、7 事例中 GII.4 が 4 事例（57%）、GII.2 及び GII.17 がそれぞれ 1 事例から検出された。また、1 事例からは GII が検出されたが、型別不能であった。

今年度のノロウイルスによる食中毒（疑い）事例の特徴は、例年に比べ事例数が少ないことにある。また、遺伝子型では、GII.4 が最も多く検出され、平成 28 年度に最も多く検出された GII.2（38%）²⁾は減少した。これらは国

内の流行状況と同様の傾向であった。

原因物質が検出、若しくは、特定されなかった事例は 23 事例中 4 事例（17%）だった。このうち 2 事例では生食用生鮮魚の喫食歴があり、1 事例は患者便の *K. septempunctata* の遺伝子検査を実施したが検出されなかった。

文献

- 1) 厚生労働省, <http://www.mhlw.go.jp/topics/Syokuchu/04.html>
- 2) 江藤良樹ら：福岡県保健環境研究所年報，第 44 号，112-113，2017

表 1 平成 29 年度食中毒（疑い）事例

番号	所轄保健福祉 (環境)事務所	初回検体 搬入日	細菌検査分					ウイルス検査分			検査結果	
			喫食者便	従事者便	ふき取り	食品	菌株	計	喫食者便	従事者便		計
1	粕屋・嘉徳・鞍手	4月6日	8				1	9	0	0	0	カンピロバクター・シジミ
2	宗像・遠賀	4月18日	1					1	1	1	1	ノロウイルスGII.17
3	北筑後	4月27日	2					2		0	0	不明
4	嘉徳・鞍手	4月28日	2				1	3	1	1	1	カンピロバクター・シジミ
5	南筑後	6月30日	3	2	4	3		12	3	2	5	カンピロバクター・シジミ
6	宗像・遠賀	7月4日	4	3	2	1		10	4	6	10	ノロウイルスGII.2
7	北筑後	7月14日	2					2		0	0	不明
8	嘉徳・鞍手、粕屋、 南筑後	8月12日	4					4	4	4	4	サルモネラ 血清型Schwarzengrund
9	筑紫、北筑後、粕屋、 京築、嘉徳・鞍手	8月16日	12					12	12	12	12	ノロウイルスGII.4
10	粕屋	8月24日	4					4		0	0	サルモネラ 血清型Enteritidis
11	筑紫	9月5日	2				1	3		0	0	カンピロバクター・シジミ
12	糸島	9月8日		4	6			10		0	0	カンピロバクター・シジミ
13	粕屋、糸島	9月20日	2					2	2	2	2	ノロウイルスGII (型別不能)
14	嘉徳・鞍手、田川	9月28日	5					5	5	5	5	ノロウイルスGII.4
15	粕屋	10月13日	2					2	2	2	2	カンピロバクター・シジミ
16	京築	10月17日	4	1				5	3	1	4	カンピロバクター・シジミ
17	嘉徳・鞍手	10月23日					1	1		0	0	カンピロバクター・シジミ
18	宗像・遠賀、筑紫、 嘉徳・鞍手、田川、京築	10月27日						0	9	9	9	ノロウイルスGII.4
19	粕屋、宗像・遠賀	11月4日	1				1	2		0	0	カンピロバクター・シジミ、 カンピロバクター・コリ
20	南筑後	12月3日	5	2		2		9		0	0	不明
21	粕屋	12月25日	4					4	4	4	4	ノロウイルスGII.4
22	筑紫	2月1日	6	3	7			16	5	5	5	カンピロバクター・シジミ
23	筑紫	2月28日	1					1	1	1	1	不明
合計			74	15	19	6	5	119	56	9	65	